

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第 203 回 葬式も、結婚披露宴も、そして総会も～お客様不在のセレモニー

2007.5.27

葬儀屋さんに聞いたが、あの業界もシーズン性があるらしい。葬儀屋のオンシーズンとは、素直に喜んでいいものか、考えてしまう。小生少し付き合いが多いせいか、月に 3~4 回は告別式に参列する。本当に親しかった人の告別式は辛いものがある。でも、お付き合いの範囲で参列する場合は、申し訳ないが、ほとんどがセレモニー感覚で参列している。

葬儀屋の司会者が、暗い、いかにも鎮魂の念を込めた独特の言い方で始まる通夜式は、何とも耐えられない思いがある。明るく、大きな声で...というのも、不釣り合い極まりないが、全く心が感じられない美辞麗句は、単なるセレモニーの開始でしかない。本来通夜とは、故人と親しかった人が、「とりあえず急いで駆けつけた」善意の儀式。読経を省くわけにはいかないが、通夜から仰々しく、指名焼香や、甲電披露をやり、せっかく参列した方々を長時間拘束するに、<sup>いたわ</sup> 労りの気持ちを感じられない。読経を聞きながら、どんどんお焼香をして頂く、それが本来の通夜かもしれない。

最近ではホールでやる機会が多いので、まだ「マシ」だが、焼け付くような真夏の炎天下、あるいは粉雪舞散る寒中の中で、会葬者を立ったまま待たせながら、実際に来てもない「お偉いさん」の甲電の披露をする必然が、どこにあるのだろうか。

故人の考え方、遺族の価値観にもよるが、首長や代議士の指名焼香を延々とする告別式。「こんな偉い人が来てくれたんだ」と自慢したいのかもしれないし、「偉い人は忙しいから」と配慮したのかもしれない。故人と同じ年配のおじいちゃんが、辛い思いを耐えながら、ずっと、後ろで立ったまま待ち続けている姿を見て、葬儀社は何にも感じないのだろうか？

故人を偲ぶとは「心」の問題、それを形にする通夜、告別式は、宗派や地方、故人や遺族によっても色々な考え方がある。しかし、儲け主義の葬儀屋が牛耳って、お客様無視のセレモニーを無理強いするやり方は、とって我慢できない思いでいる。

告別式に限らず、結婚披露宴、周年記念、受賞祝賀会等企画・主催する方は、自分たちが主役だと勘違いしている。それを助長する輩が、ホテルや結婚式場のコンサルタントや葬儀屋、お客様無視の、いらん儀式を織り込みながら、いかにも単価アップを図ろうとする商売人達であろう。たとえば、「清め」とは、本来「神道」の考え方、仏教とは相反するものであろう。いかに「清め」を豪華にするかは、葬儀屋の収支の話である。

何のために会を開催するのか？...原点を冷静に見極めれば、主役は「わざわざ来て頂いた、お客様」であること、自明の理であろう。お客様が、参列してよかったと思って頂くために、どうしたらいいか、これが企画の最大のポイントとなるはずである。

「開会の言葉」から始まって、来賓挨拶、やっと宴会の乾杯まで、1 時間、1 時間半...こんな総会をやっているところ、「田舎度」が相当高いと自覚すべきであろう。その間お客様は、じっと我慢の時を過ごす。もう、いい加減にしたいものである。